

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX011-210-5826

北海道新聞 NIE ホームページ (<https://nie.hokkaido-np.co.jp/>) でバックナンバーを閲覧できます

優秀実践3校表彰 推進協総会

北海道NIE推進協議会(菊池安吉会長)の本年度定期総会が5月13日、札幌市中央区の北海道新聞本社で開かれた。昨年度の道内NIE実践指定校37校の中から、優れた取り組みを行

った夕張市立ゆうばり小、札幌市立栄町中、富良野高が表彰を受け、代表者が活動内容を発表した。また、新たに日本新聞協会認定のNIEアドバイザーに選ばれた道内の2教諭が抱負を

語った。総会はオンラインでも同時配信され、計50人が出席。昨年度活動報告や本年度活動計画などの議案は関係者に事前送付され、承認済みであることが報告された。(関連記事2面)

写真見せ国語力育成 夕張市立ゆうばり小 富樫 忠浩 教諭



「教育現場は忙しい。だからこそ無理せず、授業や生活の中に新聞を絡める方法を考えることが重要」。昨年度のゆうばり小の代表で、現在は栗山町立栗山小に勤務する富樫忠浩教諭Ⅱ写真Ⅱはこう話す。

児童の言語能力を育む。6年生の総合的な学習の時間でも新聞を使い、夕張などの空知の炭鉱、室蘭の

鉄鋼、小樽の港湾と、それらを結ぶ鉄道の歴史や産業遺産を表す日本遺産「炭鉄港」について学んだ。子供たちから質問が出ると、疑問への答えが書かれた記事を紹介した。

また、新聞への作文投稿のほか、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう!新聞コンクール」を活用。同小からは4年連続入賞者が出ており、昨年度は児童1人が奨励賞に輝いた。

北村教諭はNIE活動の意義について「SNSで短い文章になじんでいる生徒たちが分量の多い文章にも目を向けるようになる」と指摘している。

学校図書館「ハブ」に 札幌市立栄町中 児玉 優子 司書



「教育現場は忙しい。だからこそ無理せず、授業や生活の中に新聞を絡める方法を考えることが重要」。昨年度のゆうばり小の代表で、現在は栗山町立栗山小に勤務する富樫忠浩教諭Ⅱ写真Ⅱはこう話す。

児童の言語能力を育む。6年生の総合的な学習の時間でも新聞を使い、夕張などの空知の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾と、それらを結ぶ鉄道の歴史や産業遺産を表す日本遺産「炭鉄港」について学んだ。子供たちから質問が出ると、疑問への答えが書かれた記事を紹介した。

また、新聞への作文投稿のほか、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう!新聞コンクール」を活用。同小からは4年連続入賞者が出ており、昨年度は児童1人が奨励賞に輝いた。

北村教諭はNIE活動の意義について「SNSで短い文章になじんでいる生徒たちが分量の多い文章にも目を向けるようになる」と指摘している。

北村教諭はNIE活動の意義について「SNSで短い文章になじんでいる生徒たちが分量の多い文章にも目を向けるようになる」と指摘している。

3教科横断で学習も

富良野高
北村 智裕 教諭



富良野高では国語、英語と地歴公民の3教科の教員が連携し、NIE活動を展開してきたのが特徴だ。北村智裕教諭Ⅱ写真Ⅱが実践発表を行った。

国語科では10分間の朝学習の時間に新聞コラムを読み、キーワードなどが入る穴埋め問題を解いて、感想を100文字ほどの短文にまとめた。小論文の基礎力向上や読解のスピードアップを図った。英語科では英字新聞を読んで学ぶ。興味や関心のある記事を読んで異文化理解を図り、時事問題への関心も高める。地歴公民では毎月1回、新聞に関わるスピーチを行う。生徒が政治、経済、環境問題

輪の中軸)であることを実感した」と振り返る。掲げたキャッチフレーズは「スキマ時間にNIE」。学校図書館前と職員室前に新聞の閲覧台を設置し、休み時間や放課後のちよっとした空き時間に生徒が新聞を読めるようにした。ただ紙面を掲示するだけでなく、記事内容に関するクイズを出題し、読めば答えが分かるようにして、子供たちの関心を高めている。新聞活用の鍵になるのが記事のフアイリングだ。いつ、どの新聞に掲載され、続報や特集、連載など関連記事がすぐに探し出せるために、索引が欠かせない。資料の整理保存で心がけているのが「誰が引き継いで、も使用しやすく、持続可能なものに」という点。地道な取り組みがNIEの普及発展につながっていく。

道内アドバイザー 本年度も13人

日本新聞協会は、本年度からの新たなNIEアドバイザーとして、旭川市立春光台中の庭瀬奈穂美教諭と釧路管内浜中町立霧多布中の藤雅輝教頭と釧路市立景雲

旭川春光台中・庭瀬教諭

多様な価値観伝えたい

日本新聞協会の新NIEアドバイザーに就任した旭川市立春光台中の社会科教諭・庭瀬奈穂美さんは、道大付属旭川中で勤務していた2011年から授業に新聞を取り入れ始め、上川地区のリーダーとして活動をけん引してきた。

新聞を活用して多くの授業をしてきたが、中でも記憶に残っているのが、16年に上川地区セミナーで行った「天皇の生前退位」に関する公開授業。「難しいテーマだったが、思った以上に新聞記事の内容を読み解いてくれた」と振り返る。

記事の読み比べを促し、生前退位をするには皇室典範の改正など手続きが必要などことを説明した。すると生徒からは「時代になじまない法律は変えるべきだ」「伝統を大切にすべき」などさまざまな意見が出た。家庭で新聞を取っていない生徒も多いというが、「学

浜中・霧多布中の佐藤教諭

仲間を増やし頑張る

社会科を担当する佐藤健翔教諭が道大釧路校に在学中、授業への新聞の活用をテーマに同校と地元の小・中・高の教員らによる共同研究が行われた。そこからNIEに関わるようになった。

同校大学院を経て釧路市内の北中、幣舞中に勤務。現在は釧路管内浜中町の霧多布中学校でNIEに取り組んでいる。

中の池田泰弘教諭の後任。道内のアドバイザーは昨年度と同じ13人体制となっている。アドバイザー経験者から北海道NIE推進協議会が委嘱するフェローは、引き続き旭川市立明星中の福沢秀校長が務める。

習の中で新聞の情報を読み解く力は確実につく」と話す。

社会科のほか、道徳の授業でも新聞を活用。記事の比較を通じて生徒に「社会には多様な価値観がある」と伝えることを心がけている。「教室での学びと社会の出来事が結びつく授業を広げていきたい」と抱負を語った。

道NIE研究会 新会長に菅原氏

北海道NIE研究会は、札幌市内で開いた2023年度総会で、退任する兼間昌智会長の後任に札幌市立百合が原小の菅原隆司校長

Ⅱ写真Ⅱを選出した。NIE活動に20年ほど取り組んできた菅原会長は「子どもたちの活字離れが問題となる中、文字を読んできちんと内容を理解する能力の素地作りを心がけたい」と抱負を述べた。

札幌出身の菅原会長は、道大岩見沢校を卒業した1992年に札幌市立大通小に着任。あいの里西小教



本年度から新たにNIEアドバイザーに就任した佐藤教諭(右)と庭瀬教諭

2021年には、オンラインで開かれたNIE第19回釧路地区セミナーで「歴史のまとめ(資料から歴史を読み解こう)」をテーマに実践発表を行った実績もある。

退任した池田泰弘教諭から後を託されたが「自分はまだまだ授業の中で新聞を使いこなせていない」と気を引き締める。これからはNIE活動に取り組み教員の輪が、さらに大きく広がるよう「新任アドバイザーとして微力ながらも力を注いでいきたい」と抱負を語った。



論、美香保小教頭などを経て2022年4月から現職を務める。教諭として勤務していた百合が原小が04年度からの3年間、実践指定校に認定されたことでNIEに関わるようになった。05年11月には札幌で開かれたフォーラムのパネル討

道内実践指定校 本年度は34校に

日本新聞協会は7日、学校の授業などに新聞を活用するNIE活動の拡充に向け、2023年度実践指定校530校(前年度比4校減)を認定し、発表した。北海道は32校(同5校減)となり、東京の35校に次いで全国で2番目に多くなっている。

実践指定校は全国47都道府県のNIE推進協議会から推薦を受け、同協会が認定する。本年度の道内新規認定校は7校、継続校が25校。実践指定校になると、新聞各紙が無償で一定の期間購読でき、授業などで活用される。

このほか、道内の新聞・通信社など13社でつくる北海道NIE推進協議会は本年度、独自認定校2校を選んだ。22年度の独自認定校は無かった。

論にも参加。NHKのテレビ番組「週刊こどもニュース」のキャスターを務めていたジャーナリストの池上彰さんらとともに新聞記事を活用して、いかに子供たちの関心を呼び起こし、学習意欲を高めるかなどを巡り意見交換した。

また、08年から5年間ほど北海道NIE研究会の研究部長も務めた。現在、校長を務める百合が原小は本年度から、再びNIE実践指定校となっている。

道内の実践指定校は次の通り。

【日本新聞協会認定校】

▽新規Ⅱ藤野小、百合が原小、立命館慶祥小、澄川中、屯田北中(以上札幌)野付小(別海) 永山中(旭川)

▽継続Ⅱ福移学園、緑丘小、明園小、栄町中、真栄中、手稲高、新陽高、北海道科学大高(以上札幌)永山小(旭川) 上芦別小(芦別) 中央小(岩見沢) 愛国小、星槎国際高等学校帯広学習センター(以上帯広)

ゆうばり小(夕張) 厚賀小(日高) 樹海学校、富良野高(以上富良野) 北陵中(小樽) 上浦幌中(浦幌) 標津中(標津) 上西春別中(別海) 忠類中(幕別) 芽室西中(芽室) 釧路東高(釧路町) 函館高等支援学校(函館)

【北海道NIE推進協議会独自認定校】 旭川聾学校(旭川) 富岸小(登別)

【北海道NIE推進協議会独自認定校】 旭川聾学校(旭川) 富岸小(登別)

三角ロジックで新聞読解

札幌市立真栄中学校教諭

遠藤 翔太



国語科教員として、日々の課題となるのは読解力の向上ではないだろうか。若者の読書離れが課題とされる昨今だが、「読書をしてほしい」と言葉で指導はしても、「読書ができる」ようにする指導は難しい。読書をしてほしいから読解力が向上しないのか、読解力が向上しないから読書をしてほしいのか、堂々巡りの悩みを抱えていた。

自分の指導を振り返ると、教科書で読解について



よりどころとなるものとして「三角ロジック」を導入することに決めた。「結論」(主張)を成り立たせるためには、それを支える「根拠」(客観的なデータや事例)があり、根拠と結論を結びつける「論拠」(理由付け)という3点の要素が、三角ロジックにはある。シンプルな考えだが、いざ文章を前にすると読み取ることが難しい、という課題も考えられた。

そこで、効果的だったのが新聞を用いることであつた。新聞記事は文量が適度なため、1時間の授業で扱いきれる。また、根拠や主張が明確であるため「三角ロジック」を基にした読解に最適だった。

1年目は、文章における「根拠」「結論」を読み取ることを中心に行った。同じ題材の記事を三つ比べ読み

国語の授業で3年目／実力向上に手応え

出してしまうからである。また、生徒が読み取る際に、よりどころとなるものがあればよいのではないかと考えた。繰り返しのことで学びを深められるだけでなく、授業で指導する際の学習内容も明確になるだろう、と考えたからだ。

2年目は「結論」を支える「論拠」を読み取ること、読み取ったことに対して的確に批評することこそが、本当の意味での読解力である。3年間を通して指導して

3年目である今年、複数の記事を読み比べ、「論拠」に対する批評や「根拠」を別に置き換えた際の説得力の違いを考えている。今までは単なる読み取りがほとんどであつたが、文章に対して「根拠」を明確にして自分の意見をもつこと、読み取ったことに対して的確に批評することこそが、本当の意味での読解力である。3年間を通して指導して

今年まで、生徒は着実に読解力を養っていると手応えを感じている。

参加者が二つのグループに分かれ公開授業後に行われた研究討議



「考える力」新聞活用

空知地区セミナー 参加教諭ら論議

NIE第15回空知地区セミナー(北海道NIE推進協議会主催)が6月14日、芦別市立上芦別小で開かれた。オンライン配信され、道内の教員や大学教授ら約40人が参加。新聞の活用が自ら考える力などの育成に有効なことなどが報告された。

同小の中西亜美教諭は、3年生の「発見ノート」を作ろう」という授業を公開。児童たちは小学生新聞の記事を

捕獲して告発された問題に関して、新聞の記事データベース(DB)を活用し、2年生たちが議論を交わした授業の内容を動画で紹介した。

高文連で新聞局員指導



移住者に質問を投げ掛けメモをする生徒ら

懸命に取材。執筆努力実る

釧路新聞社編集局報道部長

山本 雅之

釧路、根室管内には高校（特別支援学校を除く）が20校ある。このうち、新聞局があるのは釧路湖陵高校と釧路明輝高校、生徒会が兼務する弟子屈高校の3校だけ。文化系クラブ活動のうち放送、演劇、合唱、吹奏楽が、ほぼすべての学校にあるのと比べると少なすぎる。

釧路新聞社を代表して2021年9月15日、北海道高校文化連盟釧路支部主催の新聞研究大会の講師を務めた。高校生ジャーナリズムの土壌を耕すのは地元紙の責務と受け止め、二つ返事で応じた。「郷土紙のこのころとこれから」をテーマに講演後、事前に受け取

っていた学校新聞を講評し、添削もした。若さとみずみずしさ、着眼点の面白さを感じた半面、体系的な指導を受けていないため、表現の未熟さが気になった。

もし、また引き受ける機会があれば「新聞づくりの仕事を経験させたい」と思っていたところ、22年も講師をお願いしたいという依頼が届いた。願ったりかなったり。もちろん快諾した。ただ、参加する生徒の半分は前回も受講していることから、講演はほどほどにして取材・執筆・整理の実技を重視する。時間割を組んだ。

6月23日、会場の弟子屈高校には3校の生徒15人が集まった。前回はリモート参加もあったが、今回は一堂に会した。新聞づくり実習の流れは①弟子屈町に移り住んだ男女4人を1人に付き10分間の囲み取材②4人のうち一番記事にしたい1人についての「人物紹介」

リレーエッセー
多紙彩々

頼もしいことか。午後もちろん、スムーズにいき、夕方からの添削で忙しくなるかと踏んでいたが、どうも雲行きが怪しい。多くの生徒が落とし穴にはまった。午後3時までに投稿できたのは10人に満たず、中には、下書きさえできない生徒もいた。悔しそうだ。なぜ、学校新聞のようにはできなかったのか。理由は明白。締め切りのある仕事は初めての経験だったからだ。

実習終了後に感想を聞く。「話題を整理できなかった」「制限時間が迫ってきた」「制限時間が迫ってきた」「制限時間が迫ってきた」など、時間との競争を肌で感じ、難しさを知ったという。一方で完成品はもちろん、途中でやむなく提出した仕掛け品も含め、全てに懸命に努力した跡があった。特に21年秋に受講した2、3年生の中には表現力、技術力、創造力が格段に向上し、すぐにでも新聞社の戦力になれる人材もいた。

後日、参加者の感想文が届いた。「人生で一番、赤が入ったが、なぜかうれしかった」「学校の垣根を越えて切磋琢磨し、刺激になった」「準備の大切さを学んだ」。新聞研究大会当日は未 completion だったが、宿題として持ち帰って書き上げた力作も同封されていた。いずれも取材相手の思いをくみ取った読み応えのある内容ばかり。「なぜ、移り住んだのか」「まちのお薦めスポットは」「行政に改善してほしい点は」といった質問を繰り出す生徒の真剣な表情を思い出した。2年続けて新聞研究大会で講師を務めてよかった。一連のプログラムは、高校生や大学生のインターンシップで活用できるほか、内容を平易に短時間にまとめれば小中学生を対象にした職場体験でも生かせる。3度目があったら、どうしようか。新型コロナウイルスの影響を気にしなくてもよくなったなら、マスクを外して、フィールドワークをしたい。そして、提出してきた作品を赤鉛筆で「真つ赤」にする。手を抜かず、愚直に伝えていく。新聞の魅力。

編集後記

〇…重要なことから書き、文末に向かうに従って切られても仕方ない要素を盛り込む。駆け出しの新聞記者は「逆三角形」で記事を書くよう指導されるが、恥ずかしながら「三角ロジック」は知らなかった。本号に掲載した遠藤翔太教諭の実践奮闘記に教わった。

〇…客観的なデータや事例を元に理由付けを行い、結論を導き出す。「シンプルだが、いざ読み取るとなると難しい」という遠藤教諭のご指摘の通りだ。例えば「〇〇10%増」という記事。「好調で10%も増えた」のか「努力及ばず10%増どまり」なのか。取り上げる事例やコメントにより異なる。

〇…遠藤教諭は現在、複数の記事を読み比べ、読み取ったことを的確に批評する授業を進めているという。やはり多くの人から話を聞き、多様な事例を検証して丁寧に記事を書くという基本が大事だと改めて感じた。逆三角形スタイルで。(福)

8月に北海道
セミナー開催

札幌地区も

北海道NIE推進協議会が本年度に開く今後のセミナーは、8月10日に北海道セミナー（会場・北海道新聞社本社）が予定されている。「主體的な学びと新聞記事データベースの活用」をテーマに、教諭3人が、事例を発表する。

その後は各地区セミナーを開催。8月31日に札幌地区（同・札幌市立もみじ台中）、9月6日は十勝地区（同・十勝管内芽室南小）、10月18日に日胆地区セミナー（同・日高管内日高町立富川中）、11月9日は上川地区セミナー（同・北海道旭川聾学校）が予定されている。6月の空知地区セミナー（同・芦別市立上芦別小）と7月の後志地区セミナー（同・小樽市立菁園中）は終了した。

各セミナーに関する問い合わせは推進協議会事務局（北海道新聞社みらい教育推進室）、電話011・210・5802へ。